Shibuya Sprawl

中村　航

制作主旨

　渋谷では駅から約500mくらいの地点に都市の境界線が存在し、宇田川町周辺においては排他的な事務所ビルや巨大な駐車場などによって都市の流れが途切れ、結果として人の少ない活気のない地域が生まれてしまっている。しかしその周辺では地価や賃料の低いことを利用してアートや音楽、スポーツなどの新しい文化が発達していて、規模は小さいながらも施設が点在している。

　本計画は渋谷の文化を利用した場所の活性化の提案であり、それらの周辺施設に対するマスメディア的援助、場所の提供、コラボレーション等のプログラム的なリンクを通して渋谷の文化を拡張すると同時にアミューズメントとして人を集めることで場所の持つポテンシャルを引き出し、渋谷のエリアを拡張する。

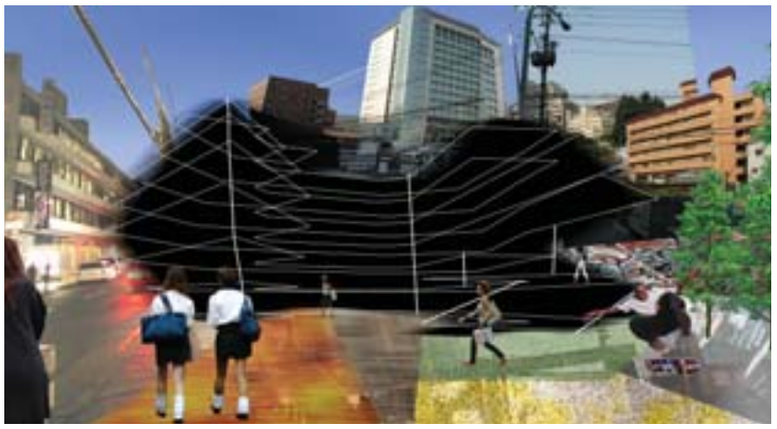
　それらの文化の展示、スポーツのスペース、アーティスト支援のアトリエなどの小空間が空間の特性に応じてパッチワークのように組み合わされ、その集積を人が体験できるようにリニアに配置し、敷地に合わせて折り曲げることで中庭との関係を生み出す。誰もがそこで遊んだり通り抜けたり、道に合わせて建築を切り取ったり、角度を与えたりと、都市に完全に溶け込みながらも機能的に生まれたヴォリュームが都市におけるランドマークとして作用する。

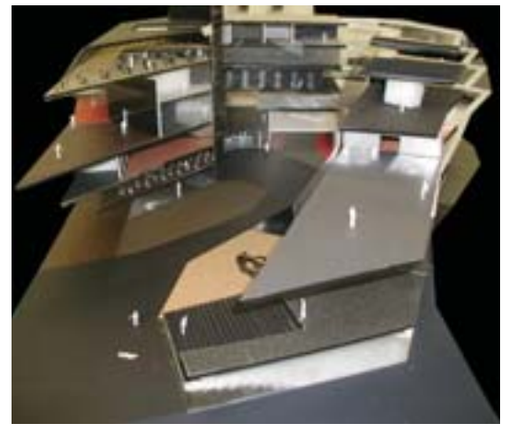
講師評：高宮真介

　私たちは日常的に「渋谷」とか「新宿」と呼んでいるが、その境界はどのあたりにあるのだろうか。この作品はそんな単純な疑問を、都市的にもっと掘り下げてみたいということからはじまった。もちろん渋谷と原宿、新宿と大久保といったように切れ目なく繁華街がつながっている場所もあるが、中心から約500mぐらいが変曲点で、実はその辺りはマイナーな文化の発信基地になっている状況を発見した。そういう場所のアクティビティを活性化させる基地となるような建築をつくろうという作品である。

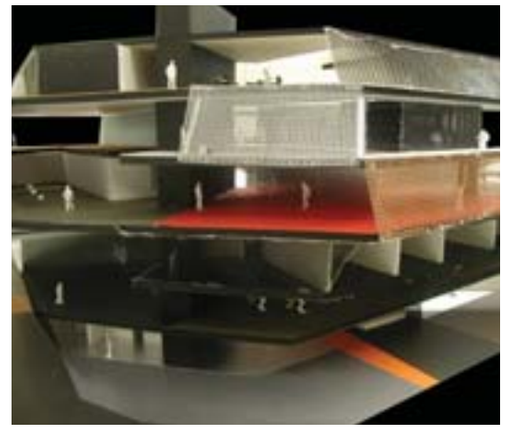
　駆け出しのアーティストのためのギャラリー、ミニライブのロフト、壁打ちテニスのヤード、それらがリニアーに脈絡もなく連結されたものをU字型に曲げたものを積層する。しかもそれらが吹き抜けを介しながら、見る見られるの関係を持ちながら連続する。非常に都市的で輻輳した魅力を持った作品だが、これほどまでにオーバーステートしなければならないのかという疑問も残った。

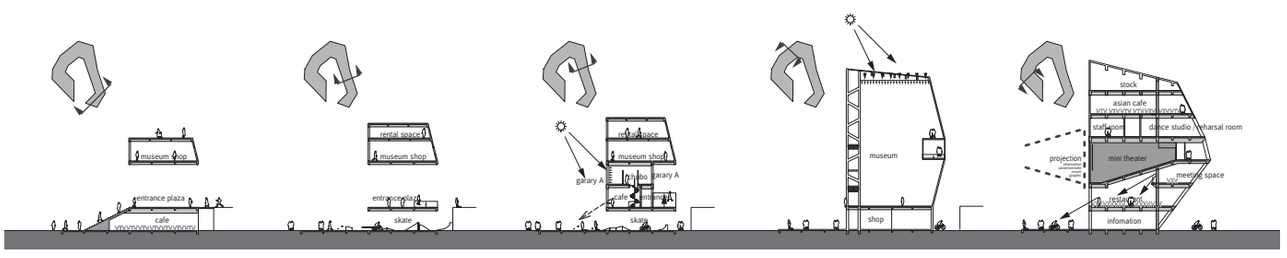
　作品の完成度が高く、そういう意味ではほかの作品と比較しても群を抜いていたと思う。しかし作品発表のプレゼンテーションにおいて、その良さを伝えきれなかったことが残念であった。

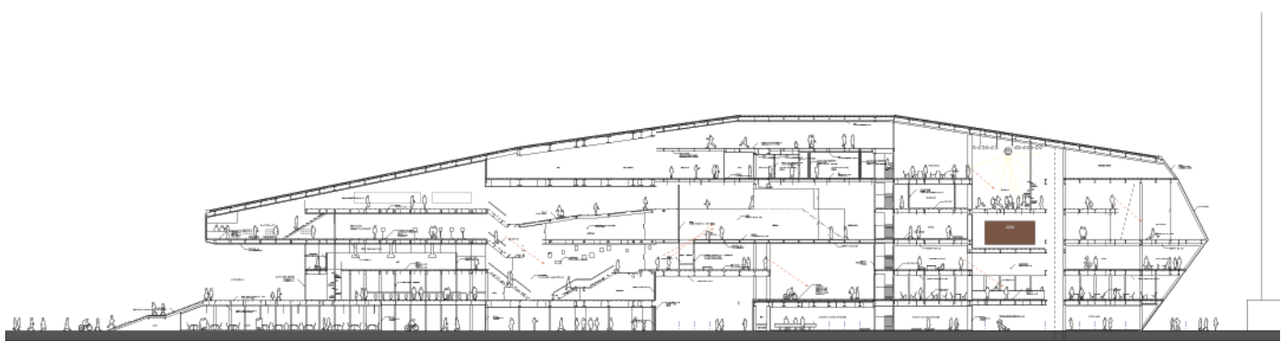




1階平面　　4階平面　　6階平面







断面